日刊 動労千葉
82.11.18
No. 1198
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四三（二二）七二〇七

いまこそ怒りの反撃に起とう

12月ゼネスト圧殺に血道をあげる全労働者の敵 動労革マルを打倒せよ

政府自民党・国鉄当局がこの一年間何をやってきたのか

政府・自民党・国鉄当局・反動マスコミ一体となった総攻撃に対し、ついに国鉄労働者が反撃の闘いを開始した。

未曽有の財政危機、体制的危機にあえぐ政府・自民党は、労働者人民へ一方的に犠牲を転嫁し、すさまじい生活破壊、権利剥奪の攻撃を加える一方で、国鉄労働運動圧殺に全力でうってでてきている。

考えてもみよ。政府・自民党・国鉄当局がこの一年間、われわれ国鉄労働者に一体何をやってきたのか。

マスコミの「ヤミ・カラ」キャンペーンを利用した慣行・既得権剥奪に始まる「国鉄一攻撃は、「職場規律の確立」、ブルトレ旅費の返済要求、乗車証の廃止、現協制度改悪、入浴時間規制強化など、「臨調！緊急十一項目」を強行実施する攻撃として、カサにかかってせめあげてきたではないか。

さらに、今日支配階級はスト権を奪った代償として自ら作った法律さえ反古にし、仲裁々定未実施という生活破壊を強制した上で、一万五千人の要員を削減する「五七・一一ダイ改」大合理化を、団交と労働条件に関する協定の締結すら全面拒否する中で、暴力的に実施する暴挙に出てきたのだ。

国鉄労働者の決起を圧殺する動労「本部」革マルを一掃せよ

国鉄労働者は、ここまで痛めつけられて黙ってひきさがるほど腰抜けではない。

だが、闘いは今まさに始まったばかりである。

今次闘争で示された国鉄労働者の底力をもって「検修下回り合理化」「年末手当獲得」の闘いを「仲裁々定完全実施要求」十二月ゼネストに結合させ、国鉄労働者の実力闘争で勝利をもぎとろうではないか。

今こそすべての怒りをとき放ち、十二月ゼネストを実現し、八三年三里塚二期阻止・国鉄決戦の大爆発と　春闘・中江選挙闘争勝利をかちとろう。

「三里塚」「国鉄」決戦の大爆発をかちとろう

国労は、十三～十四日順法闘争、十五日ストライキという全く正しい方針を決定し、動労千葉は10月26日以降三六協定破棄・非協力闘争に突入したのである。

ついに　国鉄労働運動解体攻撃に対する総反撃が開始されたのだ。

ところが、この決起に水をさし、闘いの圧殺にのりだしてきたのは他でもない動労「本部」革マル反動分子である。

動労千葉の八一・三ジェット闘争でのスト破りや、三里塚闘争への数々の敵対の事実が示すように、権力、資本と非妥協的に闘う部分に背後から襲いかかり、闘いを鎮圧してまわるのが革マルの常トウ手段である。

この動労「本部」革マルは、「五七・一一ダイ改」合理化を全面的に受け入れ、「国鉄のおかれた状況を認識し……円滑な実施をはかる」との〝産報的労使協調宣言〟たる協定を鉄労とともに片仕切りし、あまつさえ総評の国労スト支援に抗議し、スト圧殺を申し入れるという犯罪行為を行った。

これは、「働こう運動」をもって自民党・三塚国鉄当局の先兵に転落した動労「本部」革マルの当然の帰結であるとはいえ、国鉄から革マルを一掃することなしに、反合闘争はおろか、一切の闘いの勝利はありえないことは、今や誰の目にも明らかとなった。

「五七・一一」闘争は、動労「本部」革マルの大裏切りの中で、情勢をいま一歩突破することができず一定の集約を余儀なくされた。

訃報

銚子支部組合員・壇上文雄氏（五三才）は、長期病気療養のところ、十一月九日、薬石効なくついに帰らぬ人となりました。
故人の御冥福を心よりお祈りします。